

食を入口に農業の発展をめざす西条市。

その考え方には、大きな共感をおぼえます。

(大澤学長談)

の文字も刻印されていて、インターネットと網走市内のアンテナショップで販売しています。市長 大学発の地域ブランドですか。面白い発想ですね。

学長 他にも、オホーツクキャンパスでは「食品加工技術センター」が中心となって地ビールも作っています。

市長 西条でも、地元でとれるさまざまな農産物を原料に、地場のメーカーの力を借りて名産品をつくり、いずれは地域ブランドに育てたいと思っています。報発信力という点でまだ弱い。



そこで今年4月に、地元食材のPRと食品関連の産業育成をめざして、「食の創造館」という新しい施設を立ち上げ、グルメイベントなどを開いています。

学長 地域ブランド商品の開発にあたっては、やはり地域の特色をどう出していくかが、最も重要ではないでしょうか。素材だけなら、全国に産地はいくらでもある。その中でどう加工して地域のカラを出し、差別化していくのか。それが大切ですね。

■後継者問題の解決に向けて

市長 他にも頭の痛い問題はあります。いうまでもなく、後継者の問題です。今の制度を維持する限り、絶対に解決できません。特に私が危惧するのは、最近、農業高校が農業科を廃止して普通高校に転換するところが増えていることです。農業を学ぶ場が少なくなれば、後継者の育成どころではありません。

学長 本学では、地域の農業後継者として期待される方については、推薦入学制度の中に「地域後継者」のワクを設け、優先的に受け入れるようにしています。地域の優れた人材をお預かりし、成長した姿でお返しするというのは大学の使命ですから

ね。

市長 推薦する際の条件や資格について、さつそく検討しなければなりません。

学長 本学は世界の主要な大学と提携し、農学に関する世界の拠点となっています。そうした環境を最大限に利用して見識を深めていけば、地元に戻ってからもマクロな視点で地域農業について考えることができるでしょう。

■互いにプラスの関係づくり

市長 西条市では、東京工業大学同窓会である蔵前工業会のメンバーをはじめとする「ハートの会」のご支援のもと、地元ベンチャーの創業支援を目的に第3セクター「サイクス（西条産業情報支援センター）」を立ち上げ、「食品コンピナート構想」では御校の山本出名誉教授にもご助力いただいています。今後プロジェクトの推進にあたっては、お力添えをいただかなければなりません。

学長 実は本学でも、社会貢献活動の一環として地域との連携に力を入れ、市区町村と共同のプロジェクトをいくつか進めています。例えば静岡県富士宮市とは、豊かな水資源や農産物といった地元資源を生かして産

業の振興と市民の健康増進を図る「フードバレー構想」の一貫で、食育のための市民講座に教員を派遣したり、富士宮の食を集めた展示会の会場に「食と農の博物館」を提供したりしています。また奄美大島の瀬戸内町とは、産業振興や街づくりで互いに協力する協定を締結。山梨県小菅村との連携では「多摩川源流大学」という新しい学びの場もつくりました。

市長 そうした取り組みには、大いに共感をおぼえます。私は今こそ、「学と官」の能動的連携が必要だと思っています。例えば最先端の農業技術を研究するにも、莫大なお金が必要になる。企業には、いささか負担が大きい。しかし自治体なら、財政的な基盤も整っている。そこでまず最初に「学と官」が戦略的に連携して次代につながるタネをまき、それが大きな花を咲かせようという段階で「産」を巻き込んで事業化していく。それが「産学官」連携のこれからあるべき姿ではないでしょうか。

学長 まったく同感です。大学もこれからは、社会貢献性が大きく問われる時代です。大学が持っている人的資源、知的資源をどんどん地方で活用していた

だいて、一方地方では地元にある豊かな知恵や文化を学生たちに伝えていく。そういう関係が構築できれば、互いに利益があらって有意義な連携になるのではないのでしょうか。

市長 学生さんたちにも、ぜひ西条を訪ねて欲しいと思っています。西条では今、標高1500メートルの高地を利用して、スポーツ合宿の受け入れに力を入れています。また今年度中には、国内最大級の屋内体育施設も完成の予定です。

学長 本学は駅伝部が有名です。それはぜひ活用させていたいただきたいですね(笑)。

市長 もう時間も迫ってまいりましたが、話し合いはこれで終わりとは思っておりません。提携なども視野に入れながら、ご指導いただける機会を増やしていきたいと思っています。本日はお忙しい中ありがとうございます。

